

八木重吉全集

第一卷

詩集 秋の瞳・詩稿Ⅰ

財団法人日本科学協会

八木重吉全集第一卷

昭和五十七年九月二十日初版第一刷發行
昭和五十七年十二月二十日初版第三刷發行

著者 八木重吉

發行者 布川角左衛門

發行所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番號 一〇一—一九一
電話 東京(〇)七六五一(代表)
振替 東京 六一四—二三

印刷 明和印刷株式會社
製本 鈴木製本株式會社
落丁・亂丁本はお取替致します

目次

詩集 秋の瞳

卷首に（加藤武雄）

序

息を 殺せ	九
白 い 枝	九
哀しみの 火矢	一〇
朗らかな 日	一〇
フェアリの 國	一一
おほぞらの ところ	一一
植 木 屋	一二
ふるさとの 山	一三
しづかな 畫家	一三
うつくしいもの	一四
一群の ぶよ	一四
鉛と ちようちよ	一五
花になりたい	一五
無難作な 雲	一五
大 和 行	一五

咲 く 心	一七
劔 つるぎ を持つ者	一七
壺 つぼ のような日	一八
つかれたる 心	一九
かなしみ	一九
美しい 夢	二〇
心 よ	二〇
死 と 珠 たま	二一
ひびく たましい	二一
空を 指す 梢 こずえ	二二
赤ん坊が わらふ	二三
花と 咲け	二三
甕 かめ	二三
心 よ	二四
玉 たま	二四
こころの 海 うみ づら	二五
貫ぬく 光	二六
秋の かなしみ	二六

泪なみだ……………三
 石くれ……………六
 龍舌蘭……………元
 矜恃ある風景……………元
 静寂は怒る……………三
 悩ましき外景……………三
 ほそいがらす……………三
 葉……………三
 彫られた空……………三
 しづけさ……………三
 夾竹桃……………三
 おもひで……………三
 哀しみの海……………三
 雲……………三
 或る日のころ……………三
 幼い日……………三
 痴寂な手……………三
 くちばしの黄な黒い鳥……………三
 何故に色があるのか……………三
 白き響……………三
 丘をよちる……………三

おもたいかなしみ……………三
 胡蝶……………三
 おほぞらの水……………三
 そらはるけさ……………三
 霧がふる……………三
 空が凝視みてゐる……………三
 ころ暗き日……………三
 蒼白いきりぎし……………三
 夜の薔薇そうび……………三
 わが兒……………三
 つばねの穂……………三
 人を殺さば……………三
 水に嘆く……………三
 蝕む祈り……………三
 哀しみの秋……………三
 静かな焰……………三
 石塊いしぐわいと語る……………三
 大木おおいきをたたく……………三
 稲妻……………三
 しのだけ……………三
 むなしさの空……………三

ころの 船出……………五
 朝の あやうさ……………五
 あめの 日……………五
 追 憶……………五
 草の 實……………五
 暗 光……………五
 止まつた ウオツチ……………五
 鳩が飛ぶ……………五
 草に すわる……………五
 夜の 空の くらげ……………五
 虹……………五
 秋……………五
 黎 明……………五
 不思議をおもふ……………六
 あをい 水のかげ……………六
 人 間……………六
 皎々とのぼつてゆきたい……………六
 キーツに 寄す……………六
 はらへたまつてゆく かなしみ……………六
 怒れる 相……………六
 かすかな 像……………六

秋の日の ころ……………五
 白い 雲……………六
 白い 路……………六
 感 傷……………六
 沼と 風……………六
 毛蟲を うづめる……………六
 春も 晩く……………六
 おも ひ……………六
 秋の 壁……………六
 郷 愁……………六
 ひとつの ながれ……………六
 宇宙の 良心……………七
 空と 光……………七
 おもひなき 哀しさ……………七
 ゆくはるの 宵……………七
 しづかなる ながれ……………七
 ちいさい ふくろ……………七
 哭くな 兒よ……………七
 怒 り……………七
 春……………七
 柳も かるく……………七

詩稿 I

詩集 丘をよぢるおか白い路

○〈すべての季節は…〉
 (丘を よぢる)
 おもたい かなしみ
 ○〈とらんす るうせんとに…〉
 ○〈きようれつなる…〉
 ○〈ころは かけり〉
 胡蝶
 おほぞらの 水
 そらの はるけさ
 ○〈うす黄な 花を めすむ〉
 植木屋
 ○〈きのふ くれがた、ぬすんだ花〉
 赤ん坊が わらふ
 ○〈ひっかけた 街燈の ほや〉
 ○〈街に とざされたる…〉
 白い 路
 感傷

八四 八三 八三 八三 八二 八二 八二 八二 八一 八一 八一 八〇 八〇 八〇 八〇 七九 七九

霧が ふる	四
○眼の なみだは……	四
○おつ母さん、もう いいんだよ	五
山(おつ母さん、／わたしは……)	六
○まっすぐな、杉の林を……	六
ふるさとの 山	七
○ふるさとへ……	七
○死を語れば うれし	七
○赤ん坊がわらへば……	八
○いま、おほざらの どころでか	八
○あさがほか	八
〔沼と風〕〔初稿〕	八
沼と風〔第二稿〕	九
秋立っ	九
○蒼白い 狂女は	九
○くれがた、／巨いなる……	九

詩集 鳩がとぶ

(鳩が飛ぶ)

七

六	(草に すわる)
四	山(山ほど いいものは…)
五	白い 秋
六	○それにしては りっぱすぎる→
七	○かなしみはたかく…
八	○秋 立つところと…
九	○まじづかに 力つよい 雲↑
一〇	○花を 見れば 嬉しい…
一一	(夜の 空の くらげ)
一二	○あさがほが咲くといふ…
一三	○みづみづく 灰いろな…
一四	○虹は とほく しづかで…
一五	○何が 残されてあるのか!?
一六	虹
一七	はらへたまつてゆく かなしめ
一八	浪ばかりの 海
一九	こころの 月
二〇	こんど 生れて来たらば
二一	あかるい 哀しみ
二二	私の 世界

○へふしぎ ふしぎ、――

七

○黄色い 蝶が 何しにくるワ

二〇

稲妻

七

詩集大和行

秋海棠

七

わたしの 王国

七

○耳を すませば きこえてくる

六

○あをい 水のかげ

二四

(秋)

六

(人間)

二五

怒れる すがた

六

○詩は 足のすばしこい

二五

(貫ぬく 光)

九

○松のある 岩山の

二五

(こころの 海づら)

九

○色は きらきと

二五

(花と咲け)

二〇

○これは わたしの慢心

二六

平安な夕べ

二〇

○皎々とのぼってゆきたい

二六

くらい ひかり

二〇

○わたしの ライフが

二六

○詩は わたくしを

二〇

(白い 雲)

二七

夜の かまきり

二〇

○あの 月を くれますから

二七

初秋の朝

二〇

○あさの 影は まあたらしい

二七

哀しみの 火矢

二〇

○わたしの詩は わたしの真珠

二八

詩集 花が咲いた

二〇

○たとへば キーツの

二八

○行っても、行っても、

二〇

○声かしら!?

二八

(秋の日の こころ)

二〇

しづかな 画家

二九

○けふも かなしい

二〇

○私が よいんだなんて

二九

○白い 鳩がとぶ

二〇

○街路には 電車がはしる

二九

○あかるくなれ

二〇

○あかるくなれ

二九

序

二〇

大和行

二〇

秋女性

二一

○まつくらな座敷に

二二

○いちにち 海をみていた日は

二三

○いつでも わたしのこころは

二三

(うつくしいもの)

二三

○かあんと さぶしい 秋のよる

二三

私へ

二三

一群の ぶよ

二三

○へいただきに ちかづく山

二三

(鉛と ちようちよ) [初稿]

二四

鉛と ちようちよ [第二稿]

二四

(無難作な 雲)

二四

○はつ恋のうつつらとした

二四

(かすかな 像) [初稿]

二五

(かすかな 像) [第二稿]

二五

○幻精の国の中へ たった今

二五

○わたしは わざとらしきが

二五

蜃気楼

こころの 汀^{なぎさ}

○「やうやくに こころづいた…」

○「うつくしいまほろしに…」

詩集 我子病む

○「わが子は かるい 病なれど」

○「むさし野を おもふ心 切なり」

○「つかれたる 心」

○「友よ、はるかなるは…」

○「咲く心」

○「花よ、いづくにてか…」

○「うるわしきを うつくしむ」

○「秋の 空の ひろさのなかへ」

○「かなしむ」

○「バトモスの島に…」

○「わたしは 何故 うたへない!?」

○「歌うなら 美しく」

メシア

○「象牙の塔」を ののしる…」

○「貧しいところといふのは」

○「美しい 夢」

○「むだづかひしてしまった…」

○「かなしい かなしい 秋である」

○「まことの 詩人は…」

○「死を 待むころ」

秋 思

○「死と珠」

○「ひびく たましい」

○「キーツに 寄す」

○「一味 哀切の胸 せつなく」

○「花と 咲こうと ねごうたとして」

○「わたしは 花に 咲きませう」

○「ダンテの偉大は…」

不死鳥

○「蕭条として高い山から見おろす」

○「ほぶらの木にかかった」

○「かなしいゆえ」

○「わたしが うつくしい…」

○「世をいきどほるひとには」

○「キリストを みつめてある」

○「しっかりと わたしのものは…」

○「しづかな空を…」

○「正月の元日から寐ちやったの」

○「不死鳥よ、不死鳥よ」

○「キーツのソネットをよんだよる」

○「にがしいものが ながれてある」

○「わたくしは 天国が欲しい」

○「風景のなかに」

○「かなしい そのゆえで…」

○「やきつくされたみづからの」

○「ひかりと／わたしと…」

○「あやうげに／ほそい 月」

○「まことの詩を もとむるなら」

○「むなしきは名」と…」

○「さむい さむい日であるのに」

○「初恋にむねおどらせる」

○「さむい 日」

○「するどい 幻滅をかんずる日」

○「できるものなら」

詩集 ぶるふいんの うた

○「ふところ手してあゆむ若者よ」

○「さぶしいゆえ」

○「ああ いく日 いく日も」

○《のどが いたむ 日》 二五

○《わが 怒》 二五

○《かぎりない 憎しみを 食べ》 二五

○《かなしさが ながれる日》 二五

○《なにもかも 捨てきれは…》 二五

○《まぼろしの 少女よ》 二五

○《高原の 蹀音を ききましたか》 二五

○《冬です》 二五

詩稿 幼き怒り

○《男のかなわぬこともある》 二五

○《かみを 感ぜよ》 二五

○《かなしみのうみを ゆくものなり》 二五

○《なみだ多かりし日の ゆふぐれ》 二五

○《少年の日の夢をかへせ》 二五

○《ああ されど しづかなる夜》 二五

○《怒るときは死をおもふ》 二五

○《あらざる日 ありし日を…》 二五

○《かりに今宵は聖者をまねて》 二五

○《宇宙のころは かんじてある》 二五

○《わたしのころを 耕くひとよ》 二五

○《はるかに しづかなる…》 二五

○《朝あり、夕べあり…》 二五

○《かなしみのふしぎさよ》 二五

○《靈感は／ころの 花》 二五

○《詩人とは／かなしみのひと》 二五

○《あかるき 水のながれを…》 二五

○《わたしの ねがひは…》 二五

○《まどさきで けさ小鳥が…》 二五

○《なぜ 人間は死ぬるのか》 二五

○《空は／ましづかなひとみ》 二五

○《碧のゆめでありました》 二五

○《これもまた夢ものがたり》 二五

○《靈感はしづかなる野にばかり…》 二五

○《くらきころのかなしさよ》 二五

○《かなしみがひびきわたって》 二五

○《なくてはならぬものは…》 二五

○《鐘が なる》 二五

○《大いなる冬の沈黙があります》 二五

○《わたしは／白鳥を追ふてきた》 二五

○《『それならば 死は？』》 二五

○《幸福をみうしなふたひとよ》 二五

○《あかい花をみる》 二五

○《けふはくらき冬の日なり》 二五

○《くらき日はながかりき》 二五

○《われにかの日の》 二五

○《ころくたされしとき》 二五

○《ただうたわしめよ》 二五

○《りんりんと 空が きびしい日》 二五

○《ころに 憎しみの…》 二五

○《ひとをいかる日は》 二五

○《ものを読む日も…》 二五

○《ほんとに 次の世が…》 二五

○《エンゼルのなみだが》 二五

○《神よ、／ちいさい…》 二五

○《われはただ／ゆめにのみ…》 二五

○《みづのながれのように》 二五

○《たけたかき／あをぎりの…》 二五

○《さまざまの怪形》 二五

○《どうせ 死ぬるいのちでは…》 二五

詩稿 柳もかるく

○《柳も かるく》 二五

○《おもひでの小河こそ》 二五

○《怒れる夫よ》 二五

○《あかんぼの／ねがほ》 二五

詩稿 逝春賦

○「よき師／おしへたまふ」

○「小鳥をきく／わが子よ」

一六

○「わたしは／星を…」

○「かがやけるさひわひは」

一六

○「春を惜しめば」

○「春くるといふさぶしさの」

一六

○「恋は かるい」

○「哭くな 児よ」

一六

○「しづかなる／にじのごとくに」

○「花をおもへ」

一六

春「春は かるく たたずむ」

○「ゆきずりのひとびと」

一六

○「詩人よ／無心の ながれよ」

○「かなしき日は」

一六

○「ささやくことの」

○「すぎし日をおもへば」

一六

○「神のごとくいかるものよ」

○「わが子を抱いて 露路をゆけば」

一六

（怒り）

○「幸福なひととはどこにをるのか」

一六

○「世に 花咲かば」

○「幸福なひととはだれか」

一六

○「捨つるあたわず」

○「このごろは となりは空家」

一六

○「はるの野よ かるきすみかよ」

○「支那人の児が 軽わざをする」

一六

○「その冬よ」

○「美しき妻をもちたるうれしさよ」

一六

○「おどけてくらす…」

○「ねがひあるゆえの…」

一六

○「はるを うたへ」

○「悲しみは／恋人のごとし」

一六

○「まぼろしも恋もきえたものよ」

○「わが このひごろみる夢は…」

一六

○「春、／しろい空はかなしい」

○「さくらの花にみいれ、おまへよ」

一六

○「まちぬいた芽がでた」

○「にくしんの弟を 駅にむかへる」

一六

○「草は 詩人」

○「かなしげに夜はかぜがふく」

一六

○「赤んぼが すわった」

○「天国には「名」はない」

一六

○「うるわしきもの」

○「花ちりはして日」

一六

○「ふるさとに かへりゆけよ」

○「おどるようなしづけさよ」

一六

○「そらに 澄みのぼる」

一七

○「おもひでは／はなやかな ゆめ」 一五
 ○「さくら」 一五
 ○「おもひなき 哀しさ」 一五
 ○「おもひなき さびしさよ」 一五
 ○「かへりこぬ 純情の その日」 一五
 ○「まれにある ころの…」 一五
 ○「葉さくらが そうつと…」 一五
 ○「春も 逝くころ」 一五
 ○「れいかんは／野に すむ 秋」 一五
 ○「ゆくはるの 宵」 一五
 ○「ひとたびは／かなしきにとけ」 一五
 ○「夕ぐれ／おそ咲のさくらこそ」 一五
 ○「恋をみうしなうた」 一五
 ○「さくらさく／うれしき日かな」 一五
 ○「すぎし日の／うつくしさよ」 一五
 ○「よろこびのありとする日」 一五
 ○「いかれるごとく」 一五
 ○「かなしいことはあるのだが」 一五
 ○「しづかなる ながれ」 一五
 ○「かのころよ」 一五
 ○「ゆくはるのくれ」 一五
 ○「春となりて」 一五
 ○「らんかんによると」 一五

○「この日 こころいたむばかり…」 一五
 ○「さくさくとした」 一五
 ○「かしこさが」 一五
 ○「はたけのなかに」 一五
 ○「すべてをすてきれば…」 一五
 ○「はるのあめは」 一五
 ○「やなぎも」 一五
 ○「こころいたし」 一五
 ●詩 ●鞠とぶりの独楽
 憶え書
 ○「真理のほかに」 一五
 ○「いろいろな／世界がある…」 一五
 ○「てくてくと」 一五
 ○「きりすどさまをおがんで」 一五
 まり「あかんほが／にくけれあ」 一五
 ○「こどもがよくて」 一五
 ○「あかんほが／あん あん」 一五
 ○「ほくほく ひとりで…」 一五
 ○「ほくほく／ほくほく／まりを ついてると」 一五
 ○「かんしんしようったって」 一五
 ○「まりを／ほくほく…」 一五

○「ほくほく／ほくほく／まりつき をやるきもちで」 一五
 ○「まりと／あかんぼと」 一五
 ○「ひいとをよ」 一五
 ○「ほく ほく ほく」 一五
 ○「鞠も子は／まりのことを」 一五
 ○「いいもの／みつけた」 一五
 ○「まわるものは」 一五
 ○「色はなぜあるんだらうか」 一五
 ○「川をかんがへると」 一五
 ○「おもちゃに／むちゆうに…」 一五
 ○「ひとりでんに／できたもの…」 一五
 ○「こまといふものは」 一五
 ○「まりは／ぼこ ぼこ」 一五
 ○「まりに／あきたら」 一五
 まり「まわりが 赤だ」 一五
 ぶりきの こま 一五
 こま「いつか／ひどく…」 一五
 こま「ぶりきの 独楽を…」 一五
 はやし 一五
 こま「独楽はかなし」 一五
 こま「おもちゃの／かなしさよ」 一五
 こま「赤い いろは」 一五
 ○「独楽は うれし」 一五

こ まへくうん くうんと 二六

こ ま(桃子は/独楽のことを) 二六

○おもちゃを うたへば 二九

こ まへくう/らん と まる 二九

おもちゃと/おもちゃに/かかつてる 二九

おもちゃと/そのおもちゃは 二九

○なせ/おもちゃは 二九

こども(こどもは/なせ 二九

○だあれも/人のみてないところ 二九

○きりすを おもひたい 二九

○柿の花が 二九

○あても/たつてもあられない 二九

○森へはいりこむと 二九

○おほきな河のうへを 二九

○たかい たかいところから 二九

○へひるひなか 二九

○ゆふぐれ/まっ青なはらっぱで 二九

○(いいゆふやけだ 二九

断 章(花が そらへさいたり 二九

空 二九

ま りへなにがいかって 二九

おもちゃ/おもちゃよ 二九

こ ま(独楽は/おかしいよ 二九

[欠題詩群 (一)]

○まったいものは 一九

○この荷のおもさよ 一九

○わが子を/右のわきにかかへ 一九

○死は/生のたかき報酬といふ 一九

○死んでゆけば/なにもあるまい 一九

○はばかりにしやがんでみると 一九

○いつか/絵のれいかんが 一九

○いらいらしい日に 一九

○かなしくてかなしくて 一九

○梅雨ちかい街をあらくと 一九

○おかしな もも子ちゃん 一九

○久しぶりで弟から 二〇

○おちいさんから/うまれてはじめて手紙がきた 二〇

○このみちの 二〇

○にぎやかな/まちのさざめき 二〇

○豚のような生徒といふものども 二〇

○これだけの/やまひに 二〇

○やまひある日 二〇

○このいたみ 二〇

○どぶにおちた/鮎がいつびき 二〇

○皮膚がうすくはれあがつた 二四

○深みといふようなことは 二五

○うたうことが/ないといふのか 二五

○うなだれてばかり 二五

○おもふこと/なにも成らぬとき 二六

○おろかしい/わが兄のしわざ 二六

○ゆがんだ顔の妻君をもった 二六

○君はわたしを 二七

○ものうげに/草はうなだれ 二七

○うつりゆく/季節のこえをきけ 二七

○これはじぶんのわるいくせだ 二八

○あさがほくらしい 二八

○きらいなものは 二八

○つかれてしまい 二八

○足もとからけむりがたつて 二九

○わたしはわるい人間だもの 二九

○きつそうにも 二九

○幸をゆめみるひとよ 二九

○玉をみたい 二九

○たいへん/かなしい日 二九

○かたくとさした 二九

○「われをうつ/サタンの杖」 二九

○友とふたり 二九

○《神は／われにちさきものを…》	三三
○《うれひある／ころの日は》	三三
○《わが身ならぬ／かのひとの…》	三三
○《よむ本は／おしまひなさい》	三三
○《いづくにも／われにも》	三三
○《われ／いまにいたるまで》	三三
○《この世にも／花といふもの…》	三四
○《はつあきのころに》	三四
○《いくらあなたがいらいらして…》	三四
○《秋のおとづれを》	三五
○《無造作にあゆんではあるが》	三五
○《そつと頭をおさへて》	三五
○《かなしき日は》	三六
○《まよなか》	三六
○《すてばちの／となりにすむ…》	三六
○《わが児》《わが児と／砂をより》	三七
○《妻は病みたれば》	三七
○《ゆふがたのこころは》	三七
○《ゆふぐれの／あき》	三八
幸福人 I	三八
幸福人 II	三八
○《ひとすちに／ほのほをまなび…》	三八
○《われひとをしらず》	三九

○《みにくさにてもあれ》	三九
○《なにのいきどほりぞ》	三九
○《人生の門の》	三九
○《すてようとねがふても》	三九
○《みづからの／ちさき愛を…》	三九
○《全きものよ》	三九
○《これはわたしの玉座である》	三九
○《くる日も》	三九
○《菊にいた花が》	三九
○《かなりおほきな／みづのない川》	三九
○《よろこびにあつて》	三九
○《いちにち／はらをくだしてゐて》	三九
○《まぼろしこそ》	三九
○《友とゆるせりし》	三九
○《ひとよろこべど》	三九
○《いたみある日》	三九
○《なにものか》	三九
○《詩は究極であるといふのか》	三九
○《神は一人であり》	三九
○《みだらなる夢の中に》	三九
○《木のように／生える憂愁よ》	三九
○《ちいさなる／怒りにくらす…》	三九
○《うたうべき》	三九

○《この怒りやわらく日は》	三六
○《すべてをすてるとは》	三六
○《ほがらかな空は》	三六
○《この芝生までやって来たのだ》	三六
○《かなしみの日でなければ》	三七
○《じれてじれてならないとき》	三七
○《あのことも／このことも…》	三七

〔欠題詩群 (一)〕	
○《さぶしみの　その母よ》	三六
○《その母よ》	三九
○《ひかりある／そらはしづかに》	三九
○《詩につきておもふなかれ》	三九
友に与ふ	三九
○《さひわひの／おもひでは》	三九
○《なつのまをゆけば》	三九
○《死のうへにもえよ》	三九
○《われ／しだいにまづしくなれり》	三九
○《想念のちまたは／ゆたかなり》	三九
○《花をみて／うれしめば》	三九
病める友に与ふる	三九
○《すこやかなものが》	三九

○さまさまの／ほのほよ	二四	○秋、／死の　その坐に	二四	○ちいさい　ふくろ	二七
○このの野に	二四	○神、命じたまふ	二四	○ひとつのヴェランダがほしい	二七
○妻よ、／なんとしようか	二四	○もとむるにまし	二四	○美蓉がさく	二八
○このころは／野である	二五	○おほいなる／そらよ	二四	○妻よ、／さひわひおほき	二八
○おほいなる感情は	二五	○おろかしい／このころよ	二四	○うごくころ	二八
○たんじゆんなることばをうみ	二五	○ふしぎ／ふしぎ	二四	○ゆうぐれ／街にならぶはさくら	二九
○わたしのあさはかさ	二六	○ももいろに	二四	○山といひ／くもといひ	二九
○たんじゆんなことばであつても	二六	秋の女神へ	二四	○よのなかのひとがみいんな	二九
○詩をうむころ	二六	○ほそく／かすかなるこえをきけ	二四	○わたしよ／なにが	二九
○うたうときは	二六	○うなだれた／うなじのしろい	二四	○かみはきびしいといふのか	二九
○この／りんこ	二七	○うたがへる／そのことを	二四	○野はひろい	二九
○あきの／くさは	二七	○茶の果の／かたげなれど	二四	○かんげきもうすく	二九
○ミルトンの／うたのうれしき	二七	○くさをわけてゆけば	二四	○梅雨にいらうとして	二九
○かれづるにさく	二七	○いかるとき	二四	○木のえだを切ると	二九
○菊をうえた／そのよる	二七	○くろい弓にはじかれたように	二四	○わがとが病むといふ	二九
○しゆうかいどうは	二八	○やなぎ	二四	○天上を　あゆむがごとく	二九
○もたざるを／みづからにしろ日	二八	○いつも　秋であり	二四	○まるひとつの／あかんぼに	二九
○すぐれたる／うたに	二八	○かへがたきひとつのころ	二四	○おどろきの／かたまりよ	二九
○水のころは／あきにしろ	二八	○ああ　うたがひの子	二四	○わたしのころのうみを	二九
○あきの／葉は	二九	○あき、／ゆふぐれの	二四	○えいえんのすがたにもえるとき	二九
○山なみの／みねより	二九	○ゆふぐれの／ふしぎさよ	二四	○なにゆえ／草はうつしきか	二九
○さざんくわの	二九	○わびしき／庭かな	二四	○はやくも／生活につかれたけ	二九
○このころ／まつしきは	二九	○しづかなる　あき	二四	○死をおもふ日は／花をおもふ	二九

○「あかんぼが／生長する…」 二五
 ○「けしのたねと」 二五
 ○「あかんぼが／草のようにわらふ」 二六
 ○「わたしは／古い株」 二七
 ○「とほといもの」 二七
 ○「少年の／かの日のごとき」 二七
 ○「はなをみても／さびしき日は」 二八
 ○「きのう ゆうがた／うみをみた」 二八
 ○「しづかなるひは」 二九
 ○「だいこんの／たねをまく」 二九
 ○「ゆうぐれ／うみにむかへば」 二九
 ○「やまひあるごとく」 二九
 ○「あさは はれ」 二九
 ○「いかりたる／のちの さぶしさ」 三〇
 まどをひらけよ 三〇
 ○「うたは／おさなく」 三一
 ○「よくおじぎするも子ちやん」 三一
 ○「すべて私生子のように」 三二
 ○「やわらかい くも」 三三
 ○「みいんな／蒸発してしまひ」 三三
 ○「ゆふぞらの」 三三
 ○「やまひあらば」 三三
 ○「せめては／赤い花をみてあれよ」 三三

神をおもふ秋

○「日曜学校へゆく」 二四
 ○「あすこそは」 二四
 ○「この世になくて」 二四
 ○「球根をうえて／芽がそだつても」 二五
 ○「これ、すべて／みな 神なり」 二五
 ○「ゆるすならず／らい押するなり」 二六
 ○「野をゆけば／ゆううつなり」 二六
 ○「ひとりひとり」 二六
 ○「おとうとが／たよりする」 二七
 ○「かみをみうしなひたらば」 二七
 ○「かみよ／かみよ」 二七
 ○「ちいさい子よ」 二七
 ○「こまでいらいらと…」 二八
 ○「このこめのめしは」 二八
 ○「うつくしいおもひがわき」 二八
 ○「この水も／すなわち神なり」 二九
 ○「わが過ぎこしかたは」 二九
 ○「われを めぐる」 二九
 ○「女のこころをえようとおもへば」 三〇
 ○「いのるとき」 三〇

○「あかんぼは／神のひとみである」 三七
 ○「死は／神である」 三七
 ○「キリストは」 三七
 ○「みよ、ひとつのかなしむむね」 三七
 ○「あさはかな／よろこびを…」 三七
 ○「みづからを／あいするんだ」 三七
 断 章（しづかには…） 三七
 ○「ひとつのしづけさをえがけば」 三七
 ○「けいとうは」 三七
 ○「こすもすは」 三七
 ○「くろい むし」 三七
 ○「ひとをゆるさんと」 三七
 ○「じざいにしてかるやかに」 三七
 ○「かみを恋ふて／かたごひならば」 三七
 ○「かなしみを／さぶしみを」 三七
 ○「けらけらとわらふな」 三七
 ○「こどもがにぎやかに」 三七
 ○「ゆめのなかでは」 三七
 ○「むげんなるものは」 三七
 ○「ねむりに／ゆめがはじまる」 三七
 ○「蜂をみれば」 三七
 ○「かほのよい／十四くらいいの…」 三七
 ○「ほそやかなれど」 三七